

# 意見書

二十歳の私へ

作品から生まれた素朴で率直な疑問について（人間や社会について）自分の意見をもつ。

次の要件を満たして「自分の考え」をつくること。ただし、②③は必要に応じて取り入れればよい。

- ①『故郷』の作品の中から観点を絞って、自分のテーマをもつ。（根拠を作品から示すこと）
- ②『故郷』の作品からテーマに対する答えを示すこと。
- ③『故郷』の作品以外の参考となる情報（新聞・書物・歴史的事実・ニュース・著名人の生き方など）を踏まえて自分の考えをつくること。

『故郷』の作品から生まれた素朴で率直な疑問

「これから」を生きる次の世代が大事にすると良いことは何か

【結論】(1) 自分に自信をもつことで新しい生活は実現していくと考える

【そのように考えた根拠】

- ①ルントウから自信を感じない。
  - ・言われたことをやるだけの意志のない人間(でくのぼう)。
  - ・苦しみを感じてはいても表現していない。あきらめている
- ②オバマ大統領
  - ・差別的な扱いを受けても希望をもち夢に向かって前向きに生きた
  - ・「黒人であることに自信をもて」という発言

【中実な意識して書くポイント】

(2)客観性のある根拠をもとに自分の考えを述べるための工夫

(3)伏線や展開の工夫

その意図

(4)語彙や表現の工夫

その意図

ルントウは「めっそうな」や「ございます」など、同世代で友人関係だった主人公に対して敬語を使う姿が見られた。また「まるで石像のようにそのしわは、少しも動かなかった」と疲れていてもそれを表現しようとしないう、声を上げることができない石像に例えられるほど、覇気がなくなってしまう。言われたことをやるだけのくのぼうになってしまっている。このことから、自分の身分をわきまえ、「自分がすべきこと、してはいけないこと」をはっきりと区別しているように見えた。そんな身分の差のある社会を変えなくては行けないと作者は言っているのだ。

では、一体そんな社会を変えていくにはどうしたらよいのか。そんな疑問が生まれた。

そして、私は、身分の差をなくし、「新しい生活」を実現するためには、自分に自信をもつことが必要だと考えた。もし、この物語でルントウが自分のやっていることに誇りや自信をもてていたら、二人の再会は変わっていたかもしれない。

2009～2016、アメリカの大統領であったバラク・オバマという人がいる。この人は、アメリカで初の黒人大統領であった。栄光の人生を送っているように見えるが、過去には人種差別による多くの苦悩が彼にはあった。まだ大統領になる前、彼が大学生の頃、レストランで食事を終え、迎えの車を待っているとき、見知らぬ人に駐車場の人だと思われ、車の鍵を預けられたそう。他にも、現大統領夫人であるミシェル・オバマ氏の礼装でのディナーに出席した際、パーティー参加者に「コーヒーを持ってきてくれ」とたのまれたこともあるそう。黒人というだけで、このような扱いを受けたのである。こうした差別を受けながらも、彼はアメリカの大統領となった。ルントウのように心が麻痺することはなかったのである。それは、なぜか。ある名門黒人大学での卒業式スピーチで彼はこんなことを言った。「黒人であることに自信をもて」彼は、差別をどれだけ受けても、自分がしていること、学ん

でいること、大統領になるという夢をもつことに自信や誇りをもっていたのである。この姿勢を貫き通したことで、黒人は大統領にはならないという常識を打ち破り、社会を変えていったのである。

まだまだ残る多くの差別をなくし、「新しい生活」をつくるためには、次世代の子供達が、自分という人間に「自信をもつこと」が大事である。自分に自信をもつことで生まれる希望を実現したときに「新しい生活」がやってくるだろう。

平成29年 月 日 ( )

～十五歳の学びの足跡～

( ) 年 ( ) 組 ( ) 番 氏名 ( )

**【疑問や不安、さらに考えたいこと】**

- ・ 自信をもつにはどうしたらよいか。

- ①新しい社会を望む人が多くなれば、それが道になるというのは本当なのか
- ②他人に頼るのではなく、自分が一步を踏み出すことに価値があるのか
- ③野放図に走る生き方はなぜいけないのか
- ④差のない社会をつくるにはどうしたらよいか
- ⑤社会が豊かになれば、本当に差別はなくなるのか
- ⑥社会が豊かであれば、人間関係はよくなるのだろうか
- ⑦こんなにひどい目にあっても希望をもつことなんてできるのだろうか



